

〈はじめに〉

小学校の時の国語の授業の記憶がありません。いったいどんな授業で、自分はその時間を、どんな風に過ごしていたのか…図工や体育や算数や音楽は鮮明な記憶があるというのに。思い出せるものといえば、読解問題中心の国語のテストと、その点数のことばかりです。◆自分はずっと、国語と言う教科が好きなのだと思っていました。けれど最近、それは勘違いであることに気がつきました。自分は国語が好きだったのではない、ただ、読書が好きだったのだ、と。取り立てて勉強をしなくても、国語は自分にとって、いちばん“できる”教科だったので、「得意」ということと「好き」を取り違えていたのでしょう。しかし、そのようにある程度、本さえ読んでいれば、自然と国語は、とくにテストとしての読解問題は出来てしまう、というところに、国語という学習の持つ危うさが、あるようにも思います。自分にとって、国語の時間には、「問題解決」がありませんでした。算数で答えを閃く醍醐味もなければ、努力の末にクロールが25メートル泳げるようになった達成感も、国語にはなかったのではないのでしょうか。◆今回の学習会は、「読解問題」をテーマとしたのですが、現在の国語学習の中心的存在である“読解”は、比較的新しい学習形態です。明治期以前は、江戸時代の手習い塾も含めて、いわゆる国語教育にあたるものは、古典の素読・暗誦や文字の手習いが中心でした。何かの文章を題材として、それを読ませ、その内容を問う、というような形の課題が登場したのは、大正期以降と言われています。それも学習としてではなく、人を選抜する試験問題としてでした。その「読解問題」が、いつか、国語という教科の能力を評価する中核的存在となっていきます。それは、国語教科の大きな変換点でした。社会の規範となる人間をつくることを目的としていた国語が、競争を勝ち抜いて行くための受験能力を育成する国語に変わった、とも、ある意味では言えるかもしれません。他人との差別化に原点がある読解問題は、その本質に抑圧的・命令的なものがあります。子どもを国語嫌いにさせる一翼をしっかりと担っていることは間違いないのではないのでしょうか。◆その読解問題を、なぜ子どもに取り組ませるのか。成績査定という観点から離れて、その学習の持つ意義や特質が、問われたことは、あまり多くないように思います。とくに、発達障害の子どもにとっての読解問題とは、どのような存在なのか。自分自身、これまでたくさんの読解問題を作ってきました。けれども、その学習が子どもにとって、どのような役割を果たしているのかについて、深く考えことがなかったように思います。今回は、自分にとっての“読解問題の生きる道”を探る機会にしたいと思っています。